

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 香川 檀

香川檀氏の博士号（学術）学位請求論文『ドイツ現代美術における想起のかたち——ナチズム・ホロコーストをめぐる「記憶アート」の技法と歴史意識』は、ナチズムおよびホロコーストという現代ドイツにおける「負の記憶」をめぐる美術作品の分析を通じ、そこに認められる独自の歴史意識を多角的に明らかにした論文である。

香川氏は本論文で取り上げる美術作品に「記憶アート」という名称を与え、通常の歴史記述とは異なるイメージ表象ならではの歴史意識の表われをそこに見出そうとする。「想起のかたち」とは、美術作品として形象化された、そのようなイメージ表象の様態を指している。本論文は記憶アートという作品ジャンルの特徴を「痕跡採取」「標しづけ」「交感（コレスポネンツ）」「集蔵」の4つに段階的に分節化したうえで、これら4側面に対応した4章のそれぞれにおいて代表的な作品の分析を積み重ねるといった構成をとっている。

まず「序」では、ドイツにおける文化学上の記憶論から出発し、記憶アートとその4側面が概念装置として抽出される。続く第1章の「痕跡採取」では、1970年代以降に現代美術の世界で顕著なものとなった、何らかの出来事の「痕跡」を採取し保存する手法を代表する事例として、クリスチャン・ボルタンスキーの作品が考察される。香川氏は、被写体が特定できない顔写真や所有者不明の古着を多用するボルタンスキーの作品における「痕跡」の意味作用を修辞論によって読み解き、痕跡が隠喩として機能し、鑑賞者に視覚的連想を喚起して、ホロコーストをはじめとする、文化の潜在的記憶に働きかける作用を解明している。ただし、ボルタンスキーの場合には、作品に用いられた個々の痕跡が同質化され、漠然と大量死を暗示するのみの「構造的同一性」に帰着してしまっている、と香川氏は指摘する。

第2章「標しづけ」は、都市空間におけるマーキングを通して、その場所に関わる記憶を顕在化させる記憶アートを論じている。具体的な作品としては、ベルリンで制作されたボルタンスキーの《欠けた家》とヨッヘン・ゲルツの一連の「対抗記念碑」が扱われる。第1章では「構造的同一性」への個々の痕跡の回収が問題視されたボルタンスキーであるが、《欠けた家》では、ベルリンの空き地にあった住宅にかつて暮らした人びとの名を調査し、周囲の家屋の壁面に銘板で記すという「標しづけ」により、固有名と場所とを巧みに結びつけ、戦争の記憶を呼び覚ましている。この章ではさらに、同時代におけるベルリンのホロコースト記念碑論争などを背景として、記念碑がもつづくイデオロギーを批判するゲルツの思想が浮き彫りにされる一方、地中に埋めるなどといった方法でみずからの作品を不可視化してしまうゲルツの手法には、「崇高」の美学に通じるレトリックを介した、「構造的同一性」に向かう傾向が見出されている。

第3章は、ミュンスターのかつての牢獄を作り変えたレベッカ・ホルンの作品《逆向きのコンサート》を対象として、そこでホルンが構想した、死者たちとの「交感（レスポndenツ）」のための作品構造が分析される。ひとつの機械のように構成されたこの作品空間は、重層的なシンボリズムを通じて、アルカイックな儀礼にも似た、不在の死者たちとの交感を擬似的に体験させる。香川氏はホルンの作品をアンゼルム・キーファーの作品と比較することにより、そこに認められる差異から、前者の作品が有する一種の女性性を浮かび上がらせることに成功している。

同じく女性アーティストであるジークリット・ジグルドソンの《静寂の前に》を取り上げた第4章「集蔵」では、無数のドキュメントを蒐集し、それらをわざと古びた姿にされた書物の形態にまとめあげたうえで、図書館のように収蔵し続けてゆくこの作品が、歴史資料を保管する公的アーカイヴやコレクションとの対比を通じて分析されている。香川氏によれば、《静寂の前に》は断片的かつ多様なナラティブとイメージの集積であるからこそ、ドイツ現代史に関わる「対抗的知」の可能性をもちえているのである。この章ではさらに、他の女性アーティストによる蒐集アートの分析を踏まえて、「集蔵」の技法に関するジェンダー論的な考察がいっそう深められている。

結論で香川氏は、「ボルタンスキーおよびゲルツ」対「ホルンおよびジグルドソン」という、記憶アート内部におけるジェンダーの差異を注意深く析出したうえで、記憶アートの技法によってはじめて看取されたような「過去のイメージ」を、ひとつの「歴史意識」として総合的にとらえる視座を示すことにより、この論文を締め括っている。

本論文は、ドイツを中心とする記憶論の成果を発展させて、記憶アートおよびその特徴をなす4つの技法という概念をあらたに案出した方法の次元において独創的であるとともに、ケーススタディの対象とされた作品の考察においては、背景となる現代ドイツの社会・文化状況を十分に踏まえた精緻な議論を展開している。それは、ナチズム・ホロコーストの記憶という、現代ドイツが抱える巨大な社会・文化的問題に、イメージ表象の側面から果敢に取り組み、新たな研究領域を開拓した優れた成果であると言ってよい。さらに、その過程で発見された記憶アート内部のジェンダー的な差異は、男女の別をドグマティックに反映させた議論ではなく、作品そのものから導かれた発見として、現代美術のジェンダー論的分析に対する大きな貢献となる。

審査委員からは、記憶アートの独自性を明らかにするためには、「隠喩」「崇高」「想起」「類似」といった概念をより精緻化して論じるべきであるといった点や、記憶アートに課せられる倫理性へのいっそう綿密な配慮、あるいは、ドイツの記憶論や記憶アートを相対化する視座の必要性などをめぐる批判的指摘があった。しかし、これらは本論文の学術的価値を損なう決定的な瑕疵とは言えないという点で、審査員全員の意見が一致した。

以上を鑑み、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。